

実地明細絵図から読み解く明治の青森

安田 道¹⁾

Aomori city in the Meiji era to the Jitchimeisaiezu

Michiru YASUDA

Key words : 実地明細絵図、県庁通り、青森駅、旧棧橋、新棧橋、大町通り、新町通り、柳原遊郭、殺生釘

1. はじめに

青森市は、昭和20（1945）年青森大空襲により、市街地のほとんどを焼失した。またそれ以前も、幾度も大火に見舞われ、特に明治43（1910）年の大火では、やはり市街地のほぼ全域を焼失している。そのため青森の人は、「歴史的価値ある建物や街並みはないのだから」と、新しいものに価値を見出そうとしてきた。しかし明治25（1892）年発行の「青森実地明細絵図」には、大きくて瀟洒な商店等が細密な銅版画で100軒以上描かれている。この街並みが現存すれば、間違いなく歴史的価値の高い街になっていたはずである。当時の青森は、本州から北海道へのほとんど唯一の玄関口であり、北海道で自給できない食品・衣類等生活物資の供給基地でもあった。この絵図が発行された前年の明治24（1891）年には、現在の東北本線と終着点・青森駅が開業し、青函定期航路に乗り換える中継都市として急速に発展していった時代であった。当時の港の様子も、「青森港之真景」として絵図に挿入されている（図1）。当時青森の街は、どんな都市構造だったのだろうか。

この程、明治時代の絵地図に描かれた青森の街をテーマに、青森県観光物産館（アスパム）との連携展、「あおもり街の記憶 ① 明治時代」（9月20日～11月30日）として取り上げた。ここでは、その展示内容を編集し報告する。

なお、本原稿に使用した図は、すべて『目で見える青森の歴史』（青森市史編纂室、1969）から使用した。また掲載にあたり、青森市（市史編さん室）に掲載許可をいただいた。



図1 青森港之真景（青森実地明細絵図の一部を使用）

2. 青森湊のはじまり

青森港は、寛永元（1624）年津軽二代藩主信枚公が、開港奉行森山弥七郎に命じてつくらせた湊である。外ヶ浜（現青森付近）では古くから、米などの積出港として大浜（現油川）が使われてきた。

開港以前の青森は、善知鳥村と称し東に蜷貝村があった。あたりは葦や茅の生い茂る湿地帯で、善知鳥沼という大きな沼のほとりに十数件点在する漁村にすぎなかった。善知鳥沼は、かつて安潟とい大きな潟で、岸边には、古来からの名所として名高い善知鳥神社のほかいくつかの集落が点在していた。しかし横内城主の堤氏が、妙見神社の社地を切り割り、堤川を開鑿し、安潟を干拓したので広大な田園地帯となり、堤川は外敵を防ぐ外濠となった。やがて善知鳥村は、開港するにあたり青森村と改称した。

3. 実地明細絵図とは

実地明細絵図とは、実際にその場で見たままに、詳細に建物を描き記した絵図という意味であり、明治二十～三十年代を中心とした時期に、西洋の銅版画の技術と絵地図の影響により、日本全国の主要都市で、市街地図と建物の図

1) 青森県立郷土館 主任研究主査（〒030-0802 青森市本町二丁目8-14）

版を組み合わせて盛んに制作・出版されたものである。

共通するのは、大きさ・形式がほぼ同じということだ。これにより、実際の制作者が限られた技術者集団であり、各地の出版元と組んで出版したものと考えられる。大きさは、ほぼ縦70cm×横100cm程度で、銅版画を何枚か貼り合わせて作った。形式は、中心に市街地図をおき、その周りを主要な公共施設と商家（協賛金を支払った者に限る）の絵図が取り囲んでいる。市街地図には公共施設や商家の屋号がプロットされており、ほとんどの場所を特定できる。写真がまだ一般的でない時代に、実際の建物を詳細に写し取った絵図は、当時の街並みや家屋の形態を知る上で大変貴重な資料となっている。青森県内では、青森〔明治25（1892）年発行〕・弘前〔明治26（1893）年発行〕・八戸〔明治27（1894）年発行〕の旧三市のものが知られている。

4. 青森実地明細絵図

青森実地明細絵図（図2）は、明治25（1892）年発行。編著人は、川瀬善一という岐阜県出身で函館に住んでいた人である。同氏は函館・青森・弘前・八戸の各地の実地明細絵図を編集した。青森市は、当時青森町〔明治31（1898）年市制施行〕で、前年に東北本線が開通し、これから発展期を迎えようとした時期だった。中央の地図は、北（青森湾）が下で海に向いた街と捉えられ、周囲には126枚の町屋の図版が描かれている（図3・表1）。このうち118枚は屋号の一致から場所が特定できた。その町屋の図版の特徴は、大町の商家や浜町の旅館・料理店などが大きくとりあげていることだ。また、柳原遊郭が詳細な図版と地図で紹介されているのも特色。本絵図は1枚25銭で、青森の書店・小間物店で販売された。

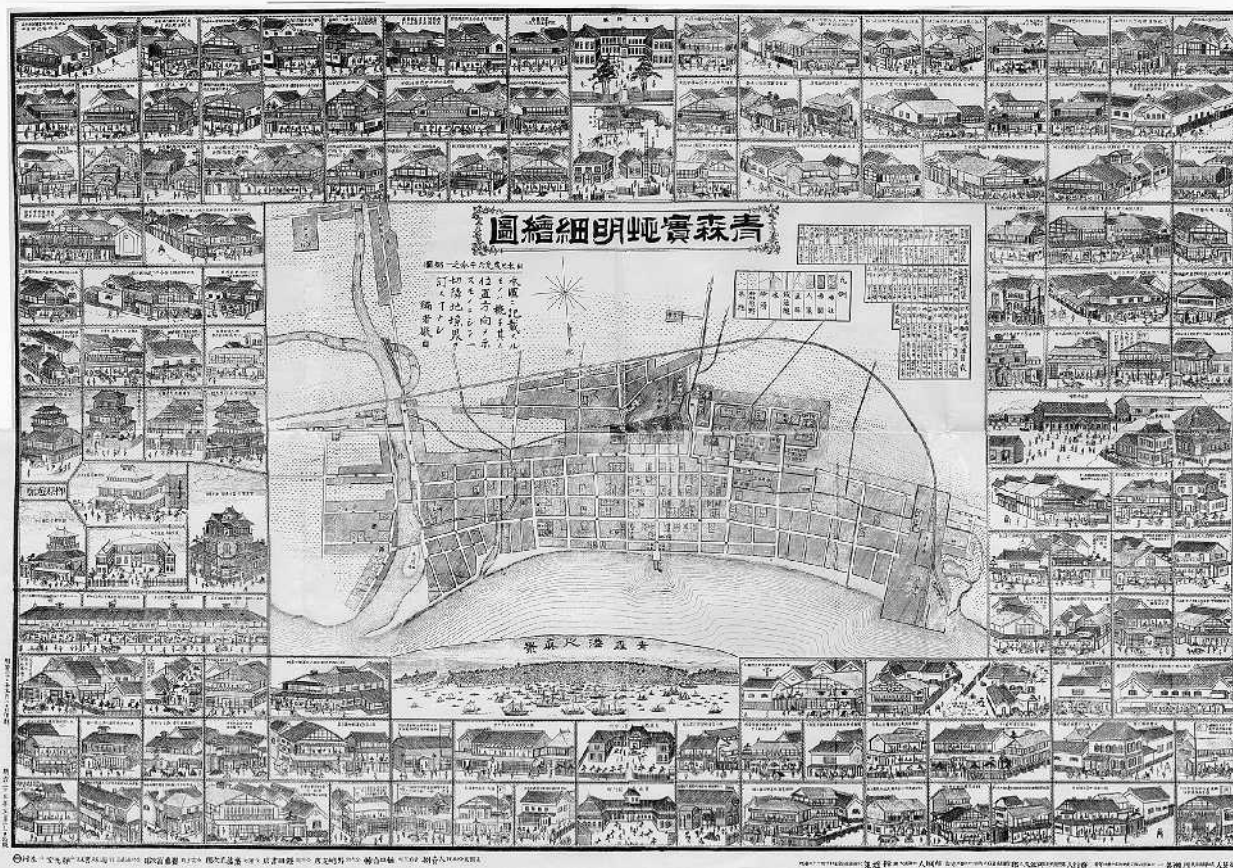


図2 青森実地明細絵図（青森市史編さん室蔵）

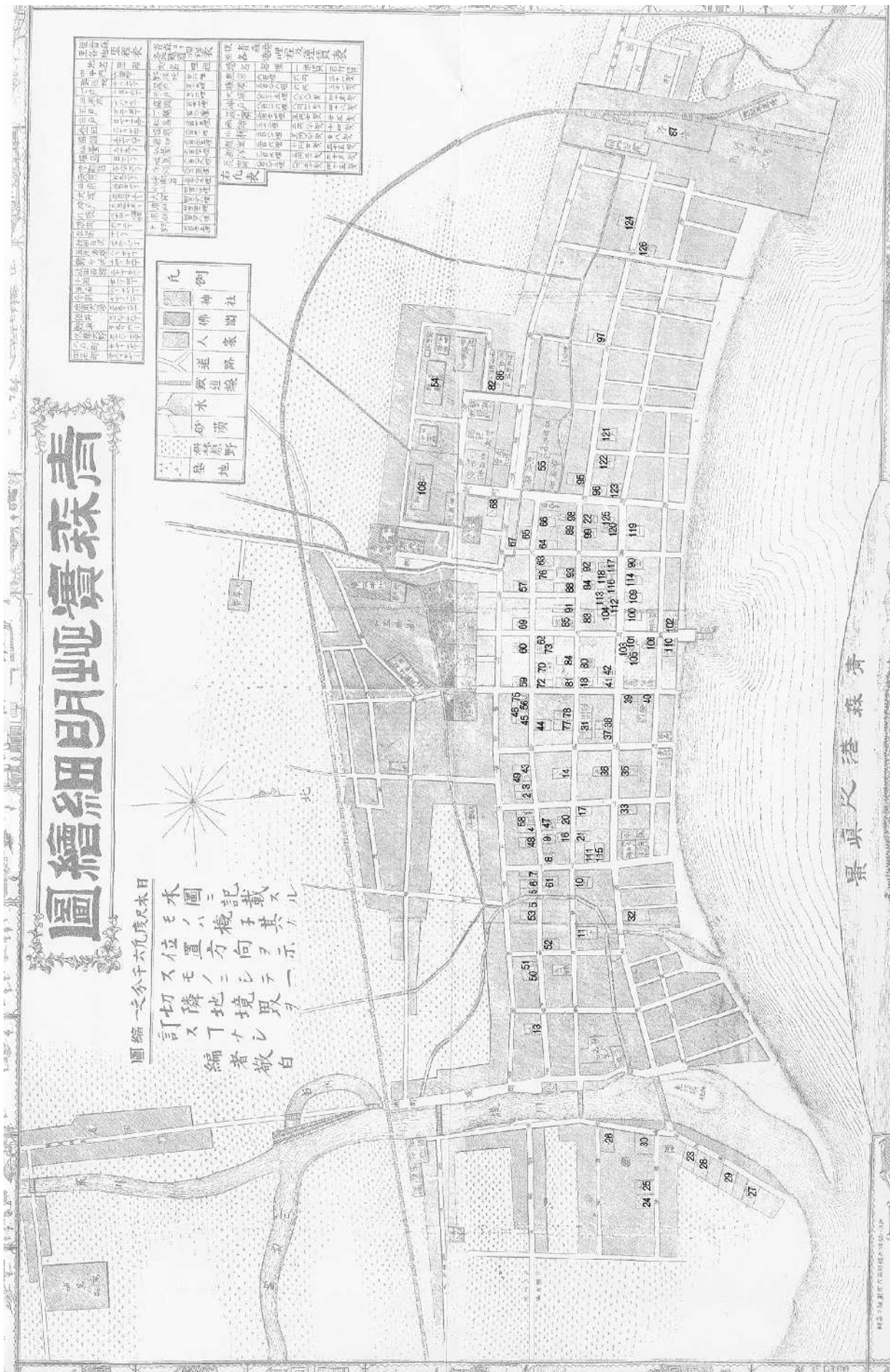


図3 建物番号入り中央地図（青森実地明細図の一部に整理番号を記入）

表1 青森実地明細絵図 建物一覧（その1）

No.	店名	町名	屋号	氏名	地図	高層	ガス灯	屋根
1	和洋小間物紙書籍洋酒卸商	米町	ㄱ	池田吉助	○			殺生釘付鬼瓦
2	萬荒物塗物瀬戸鍋釜類	米町	ㄱ	越浪齋吉	○			鬼瓦
3	呉服太物商	米町	ㄱ	山本清兵衛	○			鬼瓦
4	呉服太物洋反物古着商	米町	ㄱ	柴田吉エ門	○			鬼瓦
5	荒物造味噌海産物	博勞町	ㄱ	嶋津圓次郎	○			鬼瓦・水桶
6	和洋小間物商	米町	○	中村理助	○			鬼瓦
7	質商	米町	ㄱ	支店	○			鬼瓦
8	和洋小間物洋酒筆墨紙類	米町	○	富岡末五郎	○			鬼瓦
9	古着卸小賣古金銀賣買薬工商	米町	ㄱ	佐藤良次郎	○			鬼瓦
10	表貝師	大町	ㄱ	金澤幸吉	○			鬼瓦
11	中村座戯場	塩町	ㄱ	中村吉郎治	○			水桶
12	材木商	塩町	ㄱ	柿崎豊吉				梯子・半鐘付
13	呉服太物醬油醸造卸小賣	博勞町	○	長谷川茂吉	○			鬼瓦・水桶、商標○
14	造酒造味噌白酒	大町	ㄱ	平井久蔵	○			鬼瓦
15	日本郵船會社荷客取扱所旅人宿	大町	ㄱ	中島政吉				鬼瓦・水桶
16	和洋小間物煙草靴傘	大町	ㄱ	松原慶吉	○			鬼瓦
17	乾物類砂糖麥粉	大町	ㄱ	吹田銓次郎	○			殺生釘付鬼瓦
18	和洋小間物筆墨紙商	大町	ㄱ	野崎九衛支店	○			鬼瓦
19	奥村精米所	浦町字橋本	ㄱ	奥村勇吉				鬼瓦
20	米穀商	大町	ㄱ	奥村勇吉	○			鬼瓦
21	小間物合葉琴三味線履物類	大町	ㄱ	伊藤圓吉	○			鬼瓦
22	旅人宿回漕店	大町	○	松谷長之助	○			鬼瓦
23	貸座敷	柳原遊郭	ㄱ	伊沢その	○	四階		鳥衾付鬼瓦
24	貸座敷	柳原遊郭	ㄱ	岡本定市	○	三階	○	鬼瓦
25	貸座敷	柳原遊郭	ㄱ	大沢嘉七	○	三階	○	鬼瓦
26	貸座敷	柳原遊郭	ㄱ	長谷川才太郎	○	四階	○	鳥衾付鬼瓦
27	貸座敷	柳原遊郭	○	荒谷清治	○	三階	○	鬼瓦
28	貸座敷	柳原遊郭	ㄱ	佐藤タケ	○			鳥衾付鬼瓦
29	貸座敷	柳原遊郭	ㄱ	扇屋奈與	○		○	鳥衾付鬼瓦
30	貸座敷 富士見樓	柳原遊郭	ㄱ	棟方春吉	○	五階	○	鳥衾付鬼瓦
31	共同商館 和洋小間物下駄類	大町	ㄱ	伊藤圓吉支店	○		○	鬼瓦
	共同商館 呉服太物	大町	ㄱ	加藤市郎支店	○		○	鬼瓦
	共同商館 名産塗物鹿兒島授産煙草	大町	ㄱ	岩谷和助	○		○	鬼瓦
	共同商館 和洋小間物洋酒類蝙蝠	大町	○	大瀬与四郎	○		○	鬼瓦
32	造味噌造醬油	舘見町	ㄱ	和島傳三郎	○			鬼瓦
33	米穀商	濱町	ㄱ	柏原源四郎	○		○	鬼瓦
34	旅人宿ヌルユ	濱町	ㄱ	湯屋飯塚キツ			○	鬼瓦
35	旅人宿回漕店	濱町	ㄱ	中村三次郎	○		○	
36	渡辺時計商店	濱町		渡辺孫兵衛	○			
37	酒類醸造所	濱町	ㄱ	竹内平吉	○			鬼瓦
38	回船門屋委託販賣	濱町	ㄱ	伊藤商會	○			鬼瓦
39	旅含瀛車瀛船來客取扱所	濱町	ㄱ	かぎや支店	○			鬼瓦
40	製産組荒物問屋	新濱町	○	工藤惣左エ門	○			鬼瓦・水桶
41	瀛船取扱所小藤回漕店	濱町	ㄱ	藤林善助	○			鬼瓦
42	委託販賣回漕業	濱町	ㄱ	藤林源右衛門藤林音吉	○			鬼瓦
43	鉛製造所田名部産鉄一手販賣	米町	ㄱ	嵐森龜吉	○			鬼瓦
44	薬局阿片有名賣薬商	米町	ㄱ	浅井莊右衛門	○		○	殺生釘付鬼瓦
45	秤賣捌所古着商	米町	ㄱ	木村庄助	○			鬼瓦
46	新古着商	米町	ㄱ	上田八百八	○			鬼瓦
47	青森共益會社	米町			○			鬼瓦・水桶
48	鉄類造味噌	米町	○	渡邊佐助	○			鬼瓦
49	呉服太物洋反物仕裁綿類商	米町	ㄱ	柴田久太郎	○			鬼瓦
50	各地酒類味噌醬油酢卸小賣	博勞町	ㄱ	平井兵助	○			鬼瓦・水桶
51	名産梳油匂婦しの彩製造	博勞町	○	松井慶助	○			鬼瓦
52	質屋	博勞町	○	村林久助	○			鬼瓦
53	呉服太物荒物喰塩卸小賣	博勞町	○	和島刃右エ門	○			鬼瓦・水桶
54	青森縣廳				○		○	鬼瓦
55	善知鳥神社、青森町役場、青森警察署				○			鬼瓦
56	造味噌荒物煙草仲買商	米町	ㄱ	豊田太左エ衛門	○		○	殺生釘付鬼瓦
57	呉服太物洋反物類卸小買商	米町	ㄱ	上田幸兵衛	○			鬼瓦
58	呉服太物商	米町	ㄱ	西澤伊兵衛	○			鬼瓦
59	富春堂醫院	米町		小嶋榮	○			殺生釘付鬼瓦
60	三井銀行米町出張店	米町			○			鬼瓦・水桶
61	清酢製造商	米町	田	奥村治兵衛	○			鬼瓦

表1 青森実地明細絵図 建物一覧(その2)

No.	店名	町名	屋号	氏名	地図	高層	ガス灯	屋根
62	名産諸由製造商	米町	○	七尾幸吉	○			鬼瓦
63	萬織物商	米町	兵	枚沼正八郎	○			鬼瓦
64	荒物米穀海産物商	米町	力	鎌田嘉助	○			鬼瓦
65	呉服太物商	米町	羽	北谷幸八	○			鬼瓦
66	活版印刷業	米町	□	猪股俊典	○			
67	米穀販売	新町	主	木村得松	○			鬼瓦
68	米穀販売	新町	眞	小林長兵衛	○			鬼瓦
69	密柑四季草物乾物漬物問屋外品々卸	米町	眞	三忠支店	○			鬼瓦
70	高木診療所	米町		高木啓太郎	○			殺生釘付鬼瓦
71	和洋小間物商	米町	○	中西末太郎			○	殺生釘付鬼瓦・水桶
72	和洋菓種有名賣菓唐物小間物洋酒	米町	空	伊藤松三郎	○			殺生釘付鬼瓦
73	時計大販賣并修復	米町	冬	横田太吉	○			鬼瓦
74	和洋書籍文房具各新聞賣捌所		○	鎌田商店			○	鬼瓦・水桶
75	煙草仲買砂糖紙石油卸商	米町	合	キタ野傳右エ門	○		○	鬼瓦
76	旅客舎瀧船記瀧車乗容取扱	米町	○	津幡富三郎	○			鬼瓦
77	古着●着蒲團商	大町	○	伊藤權太郎	○			鬼瓦
78	呉服太物商大町金木屋支店	大町	長	村林嘉左エ門	○		○	鬼瓦
79	米町青森日報社發行所	米町			○			
80	五十九國立銀行	大町			○			殺生釘付鬼瓦
81	呉服太物商質屋	大町	合	木村圓吉	○			鬼瓦
82	東奥日報發行活版印刷業	新町		東奥印刷所	○			鬼瓦
83	鐵泉湯	大町	學	遠藤甚助	○			
84	米穀販賣	大町	傘	船木嘉之助	○			鬼瓦
85	久良倉鳥獸肉及牛乳卸小賣所	大町		岡野正治	○			
86	陸奥新聞發行活版印刷業	新町		新町青森活版所	○			鬼瓦
87	青森停車場、郵便電信局、東津輕郡役場				○			鳥舎付鬼瓦
88	各国和洋酒類造味噌卸小賣	大町	子	長谷川與兵衛	○			鬼瓦
89	質古着商	大町	倉	近藤慶治郎	○			鬼瓦
90	公立青森病院	濱町			○		○	鷗尾
91	宇治諸国茶商	大町	○	仁本三郎	○			鬼瓦
92	和洋小間物卸商	大町	三	奥崎三太郎	○			鬼瓦
93	呉服太物洋服裁縫店	大町	○	渡邊儀助	○			鬼瓦
94	牛乳及牛肉店	大町		木村理左エ門	○			
95	呉服太物古着	安方町	正	田中正三	○			鬼瓦
96	萬小間物陶器商	安方町	金	齋藤兼次郎	○			鬼瓦
97	旅人宿	安方町	羽	吉田精藏	○		○	鬼瓦
98	各地酒類味噌醤油卸小賣商	大町	合	小島友七	○			殺生釘付鬼瓦
99	和洋小間物糸類卸商	大町	羽	樋口喜輔	○			鬼瓦・水桶
100	旅人宿	濱町	○	和島平藏	○		○	鬼瓦
101	旅人宿瀧車瀧船乗客取扱所	濱町	杏	佐藤準助	○		○	鬼瓦
102	日本郵船會社船客待合所	新濱町	眞	中村多助中眞政吉	○		○	鳥舎付鬼瓦
103	瀧船問屋兼鐵道貨物取扱所	濱町	合	桂井順司	○		○	鬼瓦
104	旅人宿	濱町	入	塩谷●太郎	○		○	鳥舎付鬼瓦
105	陸奥馬車會社	濱町			○			鬼瓦
106	回漕店	新濱町棧橋角	金	高柳利助	○		○	鬼瓦
107	青森高等小学校							鳥舎付鬼瓦
108	青森裁判所				○			鳥舎付鬼瓦
109	旅人宿	濱町	○	宮川慶五郎	○		○	鬼瓦
110	日本郵船會社荷捌所	濱町棧橋際	○		○		○	
111	海産物造味噌商	大町	合	大村鶴松	○			鬼瓦
112	飴製造所白酒砂糖麦粉販賣所	濱町	冬	中嶋又吉	○			鬼瓦
113	飴製造所白酒販賣商	濱町	冬	千葉利八	○			鬼瓦
114	料理塵	濱町	○	神田直三郎	○		○	鬼瓦
115	造味噌醤油海産物商	大町	羽	田中與太郎	○			鬼瓦
116	料理店	濱町	合	開花樓石山嘉与	○		○	
117	金森料理店	濱町		森夕キ	○		○	鬼瓦
118	和洋酒類卸小賣商	濱町	合	松原豊次郎	○			鬼瓦
119	旅店	濱町	全	田沢市太郎	○		○	鬼瓦
120	瀧船乗客鐵道貨物取扱店	濱町	羽	松江太左エ門	○			鬼瓦
121	煙草仲買砂糖荒物卸商	安方町	子	中村與助	○			鬼瓦
122	呉服太物洋織物卸小賣商	安方町	冬	淡谷清藏	○			鬼瓦
123	回漕店旅人宿	安方町	全	早瀬由右衛門	○		○	鬼瓦
124	三立社支店鐵道貨物取扱所	安方町	○	原田組出張所	○			鬼瓦
125	旅人宿	濱町	○	山崎春吉	○		○	鬼瓦・水桶
126	鐵道貨物取扱所	安方町	○	青森陸運會社	○			

5. 繁華街の変遷と市街地の拡大

当時〔明治25（1892）年〕一番の繁華街は、大町（現本町二・五丁目、県立郷土館付近）であり、銀行・会社・大商店で占められていた。その理由は、青森駅〔明治24（1891）年開業〕は当時、現在の新町よりも一本海手の安方にあり、函館への定期船〔明治6（1873）年に始まり、明治41（1908）年以降は「青函連絡船」となる〕の乗船場は浜町の旧棧橋だった。そのため北海道へ渡る旅客や貨物は安方で降ろされ、人力車か徒歩で浜町（現本町二・五丁目、ジャスマックビル付近）まで移動した。旧棧橋で船に乗り、沖合に停泊する函館行きの船に乗り換えた。天候によって欠航することも多かったので、浜町は貨客取扱業のほか宿泊施設も発達した。さらに大町の一本山手にある米町は、北海道へ送る米穀店・味噌醤油酒醸造販売店・呉服太物反物古着店・和洋小間物店等さまざまな商店が軒を連ねていた。つまり青森駅と浜町にあった旧棧橋間の大町・浜町と、隣接する米町界隈が繁華街だったのである。ところが、函館への定期船棧橋は、明治31（1898）年に青森駅隣接地へ、明治41（1908）年には安方に新棧橋が建設され西方に移転した。青森駅も、明治39（1906）年鉄道構内拡張のため、乗降口は一本山手の新町へ移転した。こうした変化によって青森駅乗降・乗り換えの旅客は、大町・浜町まで行かなくなり、新町通りで用事を足すようになった。大町界隈は、商店・銀行街から次第に料亭・飲み屋街に移り変わり、代わって新町が賑わうようになった（図4）。

一方市街地は、寺町・県庁が南限で、その南側のできる現在の国道はつながった通りではなく、まだ自動車交通の時代ではなかったことがわかる。また当時の県庁は北向きであり、県庁通りは県庁玄関で行き止まりだった。そして、県庁通りを北上した海岸（現アスパム東側駐車場・青い海公園）に、明治41（1908）年新棧橋が建設された。つまり明治時代青森の街は、北の青森湾に門戸を広げた湊町だったのである。鉄道は、さらに南方の田園の中、現在の旧線路通りだった。鉄道開通の2年後〔明治26（1893）年〕、浦町駅が開業し、線路を南限に市街地化していった。やがて線路は、市街地の拡大に伴い、大正15（1926）年と昭和43（1968）年の2度南方に移転した。昭和43年の移転で、浦町・浪打の両駅が廃止、東青森駅が新設された。このときの線路跡は、平和公園に代表される緑地帯として、現在でもほとんどをたどることができる。こうして繁華街・市街地が移動しながら拡大していった青森の街は、残念なことに明治43（1910）年5月3日、空前の大火となり、中枢部のほとんどが焼き尽くされた。焼失家屋は7,519軒、焼死者は26名だったという。さらに復興した街も、昭和の戦災（青森大空襲：昭和20（1945）年7月28日）で市街地のほとんどが焼失し、青森の街は二度新しく生まれ変わったことになる。

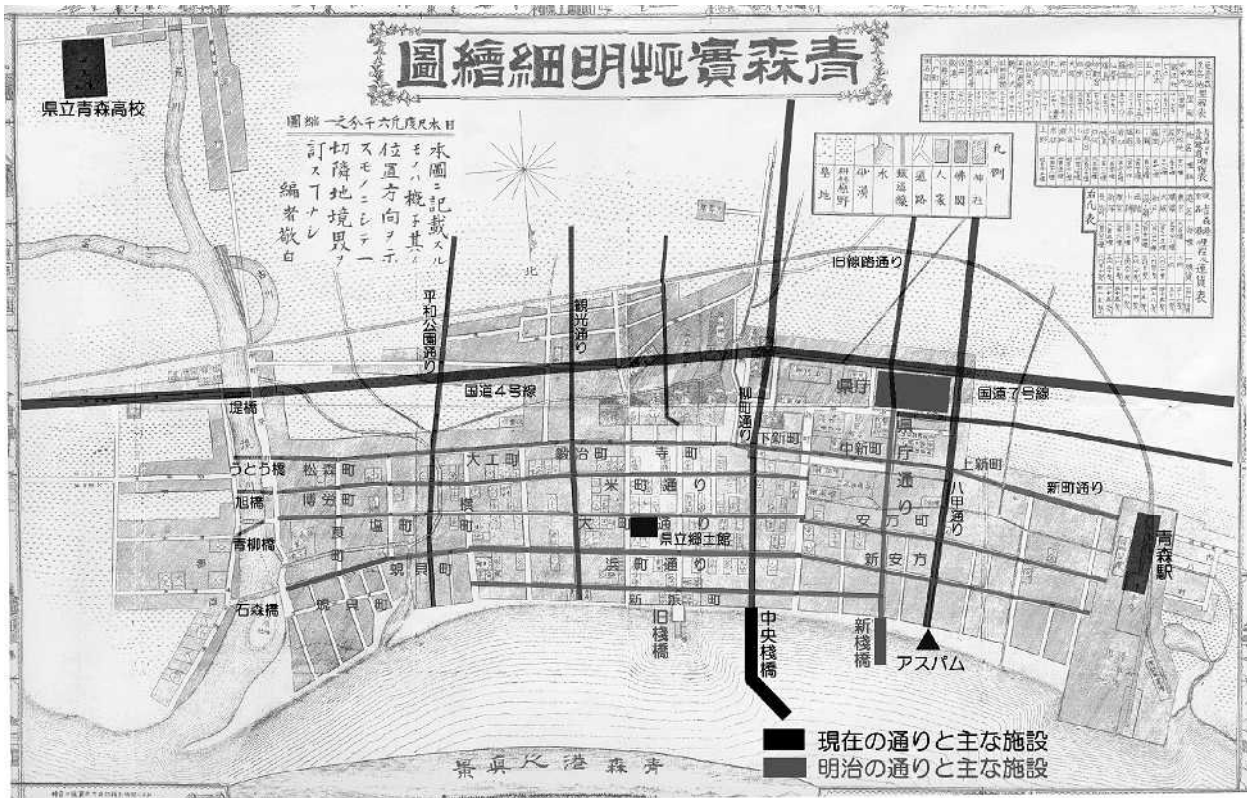


図4 通りと主な施設（青森実地明細繪圖の中央地図を編集して使用）

6. 公共施設 (図5)

(1) 青森県庁

明治4(1871)年、弘前から弘前藩お仮屋跡に移転開庁し、明治15(1882)年には新庁舎が建てられた。その後改築されたが、戦災までは昔の姿を保ち、周りには旧藩時代の堀があった。当時玄関は北向きで、その後東向きになり、現在は南の国道4・7号線に向いている。

(2) 青森町役場・青森警察署

青森町役場は、青森警察署とともに善知鳥神社境内にあった。青森警察署は、明治7(1874)年第一警察署として設置され、明治10(1877)年青森警察署と改称された。

(3) 青森停車場

青森駅〔明治24(1891)年開業〕は当時、現在の新町通よりも一本海手の安方にあり、青函連絡船の乗船場は浜町の旧棧橋にあった。その後、明治31(1898)年に青森駅隣接地へ、安方の新棧橋は明治41(1908)年以降。

(4) 公立青森病院

現在の神病院(神外科胃腸科)の場所にあった青森病院を公立にした。その後県立となり、現市役所付近、現青い森公園付近を経て現在地(東造道)に移転している。

(5) 青森裁判所

当時すでに、現在とほぼ同じ場所にあった。

公共施設は、その公共性から都心部の事象であるが、ある程度の面積を有する必要性から、都心の周辺部に位置する場合が多い。明治の青森も、分布からその例外ではないといえる。



図5 公共施設分布図(青森実地明細図の中央地図に場所を示し図版を挿入)

7. 柳原遊郭

青森で最初の遊郭は、当時中心街だった大町の東に隣接する塩町(現青柳)にあった。道端に人力車が整然と並んでいる写真が残っており、繁栄の一端がうかがえる。その塩町遊郭は、明治22(1889)年の火災で焼失し、さらに東方・堤川対岸の柳原(現港町)に移転した(図6)。規模は、当時東北で一、二といわれた。川向こうからも目立つようにするためか、木造三階建てや、四階建ての上に望楼風の部屋を持つ巨大な貸座敷(富士見楼)もあった。また店先には、当時普及したてのガス灯が灯され、夜になれば華やかな賑わいの様子が、対岸からも見られた。人々は、青柳橋を渡ろうか躊躇したらしく、当時青柳橋は思案橋とも呼ばれた。柳原遊郭の女郎衆は200名。一・二等貸座敷は12~13軒。三等貸座敷は30軒くらいあったが、明治43(1910)年の大火で焼失し、東北本線南側の旭町森紅園

(あさひちょうしんこうえん)へ移転した。しかし旭町への移転は、繁盛しなくなるという見通しをつけた、三升楼・富士見楼などの一等貸座敷は、函館市の大門(だいもん)遊郭〔現在の東雲町(しのめちょう)〕へ移転したので、規模は縮小した。

遊郭は、元々繁華街に隣接する事象だったが、風紀上の問題から近代化に伴い市街地から切り離され、川向こうへ、さらに線路で隔てられた外側へと移動し、やがて法規制によって消滅した。



図6 柳原遊郭分布図(青森実地明細絵図の中央地図に場所を示し図版を挿入)

8. 特徴的商家・現在につながる建物(図7)

(1) 「牛肉」の旗を掲げた「鳥獣肉及牛乳卸小賣所」

牛肉と牛乳を販売する店だったのであろう。明治維新まで仏教の影響から、一般的でなかった肉や牛乳の販売店が他にもいくつか見られる。また、和洋小間物店、和洋書籍文具店、洋酒等の舶来品を扱う店も多かった。こうした店も大町・米町を中心とした地区に多い。

(2) 4店舗が一つ屋根の下に入った「共同商館」

店構えからすると、ガス灯が灯されているなど、現代でいえば市場というよりショッピングモールの建物だ。商品も、和洋小間物・呉服・塗物等の買い回り品だった。

(3) 「渡辺時計商店」

現在、昭和通りに店を構える青森市で一番古い老舗の時計店。創業は明治16(1883)年。現在の経営者は五代目。看板の文字は、絵図中唯一、左から右に書いてある。西洋に強く憧れた創業者があえてそうしたのだという。

(4) 「鉄類造味噌米町〇渡邊佐助」

マルサ味噌を製造販売していた丸屋醸造株式会社は、弘化5(1848)年創業の県内で最も歴史のある蔵だったが、2004年ワダカン株式会社に吸収合併された。マルサ味噌は、現在も青森市八幡林の工場で生産されている。

(5) 「呉服太物商大町金木屋支店 カネ長 村林嘉左エ門」

かつて新町に「カネ長武田」というデパートがあったが、その前身が安政年間(1850年代)大町に創立した。「カネ長武田」⇒「ダックシティ・カネ長武田」⇒「青森ビブレ」と変遷し、現在は「さくら野百貨店」となっている。青森店の看板の上部にはビブレ時代から「長武田」のロゴが付けられている。

(6) 「五十九銀行国立銀行」

第五十九国立銀行青森支店が、明治12(1879)年当地に設立した。当時大町界隈には他に、日本銀行・安田銀行・勸業銀行等たくさんの銀行があった。第五十九銀行青森支店は、青森銀行本店を経て、現在は県立郷土館の

大ホール〔昭和6（1931）年建設、平成16年国の登録有形文化財（建造物）指定〕となり、企画展・特別展の展示室になっている。

(1)～(3)に関しては、この時期の新しいタイプの店舗とみられる。(3)～(6)に関しては、現在も存在したり、それにつながる事象である。そのため当時一番の繁華街だった大町・浜町・米町に分布していた。

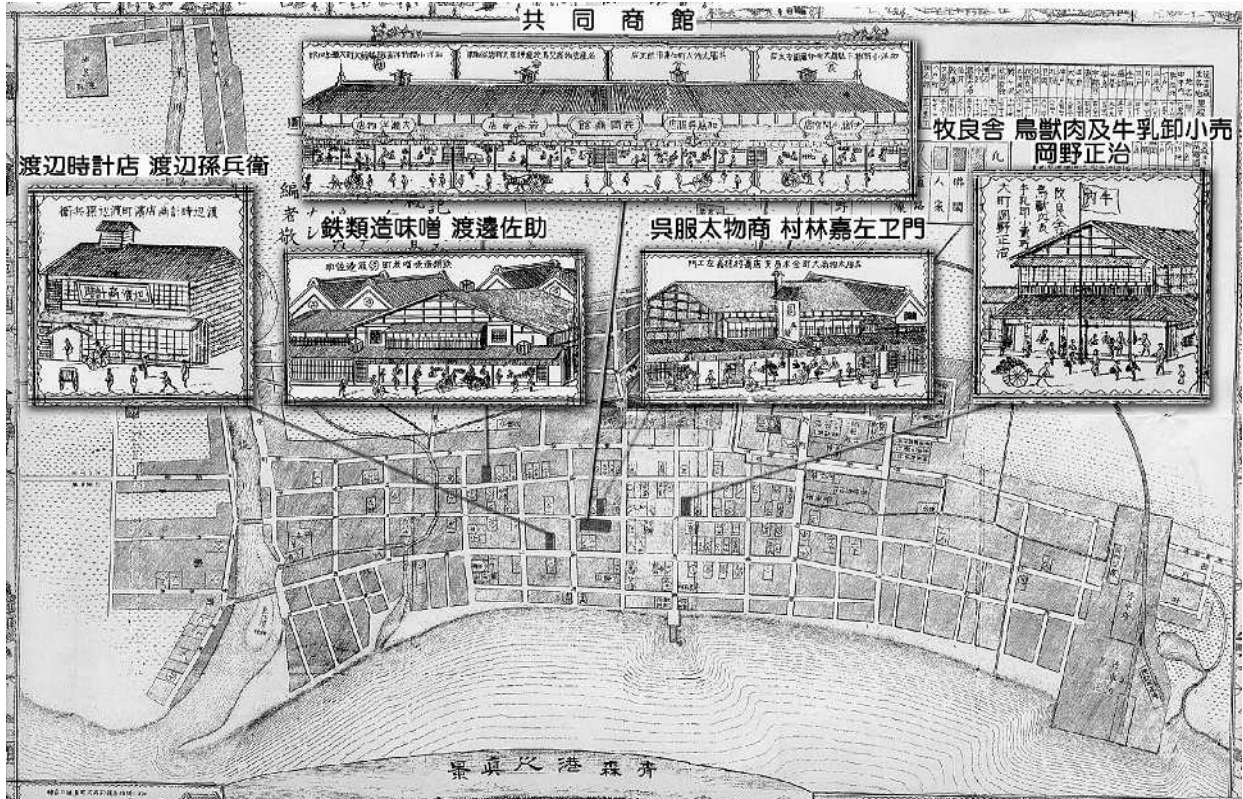


図7 特徴的商家・現代につながる建物分布図（青森実地明細絵図の中央地図に場所を示し図版を挿入）

9. 家根の形状について



図8 殺生釘付鬼瓦の建物分布図（青森実地明細絵図の中央地図に場所を示し図版を挿入）

現在、関東以西で一般的な瓦（かわら）ぶき屋根は、青森県ではほとんど見られない。その理由は、豪雪・寒冷地では、凍害・雪害によって毎年のように瓦の補修・ぶき替えが必要になるためだ。しかし青森実地明細絵図では、蔵の大半が瓦屋根であることが分かる。そのうち鬼瓦に殺生釘（せっしょうくぎ）²⁾が付けられたものが10棟確認できた（図8）。殺生釘は、過去に存在したことが確認されたものも含め、全国でも100例足らずといわれる。その分布の範囲は、大脇潔（「殺生釘補遺」2008年）によると、「西は京都・奈良から北海道までと東に偏在することも明らかになった。一方、大阪以西では全く見かけず、鳥衾³⁾（とりぶすま）付鬼瓦の独り舞台である。」とし、時期は、「江戸時代から明治・大正・昭和にかけて流行した」比較的新しいものとしている。

青森県旧三市の実地明細絵図によると、青森町の10例、弘前市の2例、八戸町の4例の計16例が明治時代にあったと確認でき、新興都市青森の数が際だっている。青森の10例の分布は、当時のメインストリートの大町通りに3例、その一本山手の米町通りに6例で、残り1例は場所が確認できなかった。この10例は、当時流行の殺生釘を真っ先に取り入れた建物であり、屋根の棟はしの日輪のような殺生釘を見上げた人達は、その家の財力や勢いを感じたことだろう。また寒冷地にもかかわらず、あえて瓦屋根にした理由は、当時大火が多かったからで、類焼防止のためとみられ、瓦屋根家屋の多くが土蔵であったこともその証拠と考えられる。それ以外の建物は柂葺（まさぶ）きなど木製が多く、やはり類焼防止のため、屋根の上に水桶が置かれた家屋も多く見られる（表1）。

10. おわりに

今回の連携展では、青森の街が黎明期だった明治時代を取り上げたが、想像以上の繁栄ぶりに驚いた。またその大きな要因である、交通機関の発達とその乗降口の変遷、さらには市街地の発展・拡大により、街の構造が変化していくのだが、その元々の様子を読み取ることができ、ひじょうに興味深かった。こうした街並みが、明治43（1910）年の大火と昭和の戦災でほとんど失われたのは、返す返すも残念である。今回は特に、公共施設・柳原遊郭・特徴的商家等・殺生釘付瓦屋根の建物の分布を取り上げた。特徴的商家等・殺生釘付瓦屋根の建物が分布する大町・米町・浜町界限は、当時一番の繁華街であり、公共施設・柳原遊郭は、それに隣接して分布していたことが分かった。

今後は、復興していく大正期、県都として繁栄していく昭和初期、焼け跡から三たび復興する戦後期と、時代の流れにつれて青森の街並み・都市構造が移り変わってゆく様子を取り上げることしたい。

最後になったが、貴重な助言を頂いた泉史編さんグループ主査 中園裕氏、本テーマを与えてくれた県立郷土館学芸課長 昆政明氏、新鮮な視点を示し作図まで指導してくれた同副参事 相馬信吉氏、その他多くの方々のおかげで、ささやかな初展示を無事終えることができたことを、この場を借りて感謝申し上げます。

2) 殺生釘（せっしょうくぎ）

鬼瓦・鬼板の先頂部に、十本弱（7～10本程度）の釘状の金属棒が放射状につけられたもので、最初は鳥による糞害を防ぐ目的であったが、後に魔除け・装飾的なものに変化したとみられる。しかし、研究者が少なく詳細は不明。

3) 鳥衾（とりぶすま）

鬼瓦・鬼板の上部に取り付けられた、長く反って突き出した円筒状のもの。最初の設置目的は、鬼瓦の落下防止という実用的な理由だったが、次第に装飾的な目的で長く伸びるようになり、鷗尾（しび）や鯨（しゅちほこ）の代用の役割も果たすようになったといわれている。

引用・参考文献

青森市史編纂室編集（1969）『目で見る青森の歴史』、青森市役所。

東奥日報社編集局編集（1968）『写真 青森県百年史』、東奥日報社。

肴倉弥八編（1980）『ふるさとの思い出 写真集 明治・大正・昭和 青森』、国書刊行会。

肴倉弥八（1976）『青森市町内盛衰記』、歴史図書社。

瀧本壽史監修（2007）『図説青森・東津軽の歴史』、郷土出版社。

青森市史編さん委員会（1989）、『青森市の歴史』、青森市。

大脇潔（2006）「みちのく躰紀行ーカワラ前線北上スレドモー」、『民俗文化 第18号』、近畿大学民俗学研究所、p121 - 310。

大脇潔（2008）「殺生釘補遺」、『民俗文化 第20号』、近畿大学民俗学研究所、p241 - 270。